

2019 年度石本賞選考結果報告

「石本賞」選考作業部会長
岡田光弘

石本賞は、石本新氏のご遺族の寄付金をもとにした事業の一環として 2006 年度に創設されました。本年度から遡って過去 3 年間に『科学哲学』に掲載された論文で、掲載決定時点で 40 歳未満である著者によるものの中から優秀な論文を一篇選び、その研究活動を支援・奨励することを目的としています。

これまでの受賞作は次の通りです。

- | | | |
|------|--------|---|
| 第一回 | 青山 拓央 | 「時制的变化は定義可能か
—マクタガートの洞察と失敗—」 |
| 第二回 | 三平 正明 | 「フレーゲ：論理の普遍性とメタ体系的観点」 |
| 第三回 | 前田 高弘 | 「知覚経験の対象としての性質」 |
| 第四回 | 大塚 淳 | 「結局、機能とは何だったのか」 |
| 第五回 | 山田 圭一 | 「ウィトゲンシュタイン的文脈主義
—壊れにくい知識モデルの構築をめざして—」 |
| 第六回 | 小草 泰 | 「知覚の志向説と選言説」 |
| 第七回 | 佐金 武 | 「現在主義と時間の非対称性」 |
| 第八回 | 大西 勇喜謙 | 「認識論的観点からの实在論論争」 |
| 第九回 | 秋葉 剛史 | 「Truthmaker 原理はなぜ制限されるべきか」 |
| 第十回 | 細川雄一郎 | 「反事実条件文推論の動態論理による形式化」 |
| 第十一回 | 北村 直彰 | 「存在論の方法としての Truthmaker 理論」 |
| 第十二回 | 榊原 英輔 | 「What Is Wrong with Interpretation Q? : A Case of Concrete Sceptic's Alternative Interpretation of Algebra」 |
| 第十三回 | 鴻 浩介 | 「理由の内在主義と外在主義」 |

そして、今年度の受賞作は次に決定しました。

李 太喜 「選択可能性と「自由論のドグマ」」(2018 年 51 巻 1 号掲載)

以下、この候補作についての作業部会の評価を報告します。

李論文は、選択可能性と合理的自己決定性という、直観的には自由にとって不可欠と思われるにもかかわらず、たがいに衝突する二つの条件をいかに折り合わせるかという、周知の難問に取り組み、新たな観点から回答を与えており、哲学的に意義が高いと言えます。選択

可能性と自由の非両立に関わる諸先行研究が「自由であることは合理性とコントロールをもっぱら向上させる」という自由論の「ドグマ」に基づいてなされてきたと著者は指摘します。この「ドグマ」の妥当でないことが自由概念の記述的側面から議論され、それを通じて選択可能性と行為性の新たな関係が示され、自由と選択可能性の非両立問題の「解消」が示されます。論の展開に独創性が認められます。論じ尽くされた感のある選択可能性と自由の問題に新しい展開をもたらし、自由論の議論に一つの概念的スペースを見出したと認められます。

一方で、自由を巡る議論形成に「ドグマ」が深く関わっていたという著者の指摘は興味深いですが、歴史的証拠をさらに挙げながら論じるべきではなかったかという意見もありました。自由概念の記述的側面を通じた議論はかなりの説得力はあるものの、やや一方的議論に見える面もあり、反論を想定した補強的議論も加えることが望ましいという意見もありました。このような批判的意見はありましたがこれらは著者の将来の仕事に対する期待を表すものであり、5人の作業部会委員全員が本論文を高く評価しましたので本論文を石本賞受賞作として推薦することに決定しました。

次に、選考の手順と経過を簡単に報告しておきます。今回の候補論文総数は8篇であり、事前アンケートによる推薦論文は今回ありませんでした。6月23日開催の編集委員会で推薦された4篇に選考対象を絞り、5名の選考作業部会メンバー全員で検討することにしました。選ばれたのは以下の4篇です。

横路佳幸「同一性の相対主義の可能性と限界」(51-1)

李太喜、「選択可能性と「自由論のドグマ」」(51-1)

小川祐輔「仲介者を措定する認識論から脱するということ」(51-1)

源河亨「悲しい曲のどこか「悲しい」のか？」(51-2)

これらの論文4篇について作業部会メンバーそれぞれが独立にコメントを付けながら順位付けを行い、全員の評価結果を集計したうえで、作業部会メンバー全員で議論し総合評価を形成する、という手順を踏みました。他の論文にも高い評価を得たものがありましたが、単純集計結果でもコメントでもトップの評価であった李論文が、作業部会の総意としても評価が高いという結論に至りました。この結果、李論文を推薦することとなりました。

選考の経過は以上の通りです。

なお、本年度の作業部会メンバーは以下の5名でした。

伊勢俊彦、岡田光弘(部会長)、戸田山和久、松坂陽一、山田友幸
